



2020

4年後のことを言うと、鬼も笑えない。

FUKUYAMA

Eiji Murakami presents

前号は福山駅前構想を發表しました。財源をどうするのか?というところからも、私の駅前再開発構想は実現可能な選択を選びました。今月号は、少子高齢化によって福山市の未来はどうなっていくのか?を推察していきます。

村上栄二 HP
「村上栄二しんぶん増刊号」
https://murakamiejicom.jimdo.com

こちらのQRコードからもアクセスいただけます。

今回のテーマ、ざっくり言うと…

- **37%×1.4=55%**で見える日本の未来
- **福山市の財政は2023年までに単年度48億円累積190億円の赤字見込み**
- **中小企業事業計画、個人の人生設計もバックキャストの考え方が必要**

団塊の世代が2025年頃までに65歳以上高齢者人口は、約3500万人(人口比約30%)、後期高齢者(75歳以上)に達する事により、介護・医療費等社会保障費の急増が懸念される問題です。国民の3人に一人が65歳以上、5人に一人が75歳以上となる超高齢化社会、しかもここから数十年に渡って高齢者比率が高止まりせず続きます。

結果として日本の国力は著しく低下し、税収減、社会保障費増、財政悪化、さらには景気が上がる可能性はほぼゼロ。少子化対策を行い、出生率を上げる事が出来たとしても、出生数は母数が減るので焼け石に水の状態となります。

少子化対策の数々は税金の無駄遣いで人口が増える事はほぼ可能性はゼロに等しく、景気も上がる要素は何一つとしてない。それが現実なのです。

なぜならば25〜39歳の女性人口が今後25年間で37%減少する推計結果に出生率1.48を算出し基づけば、50年後には25〜39歳女性人口が55%も減少する将来像が必然の結果と浮き彫りになるからです。

それでは図1にある福山市の財政を見てみましょう。

市税は2008年度811億、6年間で100億円減少しています。また社会保障費は2008年度400億、6年間で170億円増加

しています。

2018年度では17億円財政赤字が見込まれ、23年度48億赤字、合計累積欠損金は190億円を超える財政状況となります。

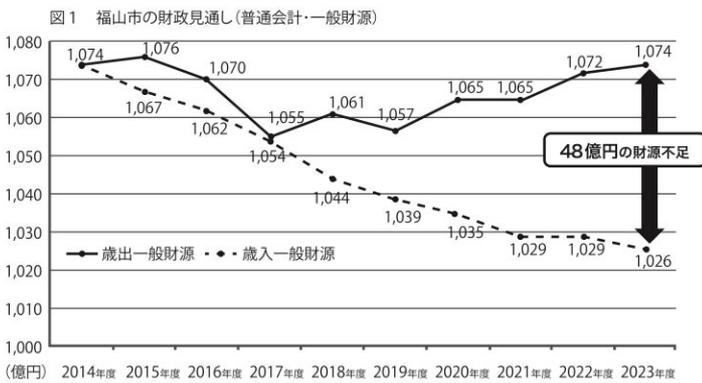
しかも、これは景況感を維持し、国からの補助金を含めた「現行制度を基本」としての話です。

今後の日本経済を考えると市税は更に減少し、オリンピック以後の景況感を考えると補助金も減額される事は容易に想像しうる事となるでしょう。

だからこそ、未来を予測し現状に如何に対応していくのか?決断する政治・経営判断・人生設計が必要となのです。

少子高齢化時代に必要と考え方であるバックキャストとは「将来を起点として現在から将来に至る道筋を展望する考え方」で、人口も消費も減少する時代では将来の市場を分析した上で売上目標を立てなければならぬわけで、そのために未来の市場を理解し、組織体制を変え、売上目標を設定していくことが必要なわけです。

つまり、人口増の時代であればフォアキャストの考え方で通用したのですが、(フォアキャストとは「現状を起点として将来を展望する考え方」で、人口も消費も増えている時代であれば市場は拡大するので、今年の売上から5%増で105%の売上目標を設定するという具合で良かったのです。)今後の少



子高齢化時代ではバックキャストの考え方が経営者には必要不可欠です。正確に数字と未来の状況が判断できれば対応は幾らでも出来ます。

AIやロボットの進展が期待される一方で、オリンピック後の日本経済は厳しいという情報が流れていますが、より分かり易く「社会がどのように変化していくのか」について、評論家やネット談議での漠然とした未来の話ではなく、少子高齢化による社会的変化や税制、行政機構や政治的課題、既得権による抵抗やしがらみなどを踏まえて未来の輪廓を10月号以降は皆さんに伝えられたらと思っております。